北原白秋著

トンボの眼玉

絵入童謡集

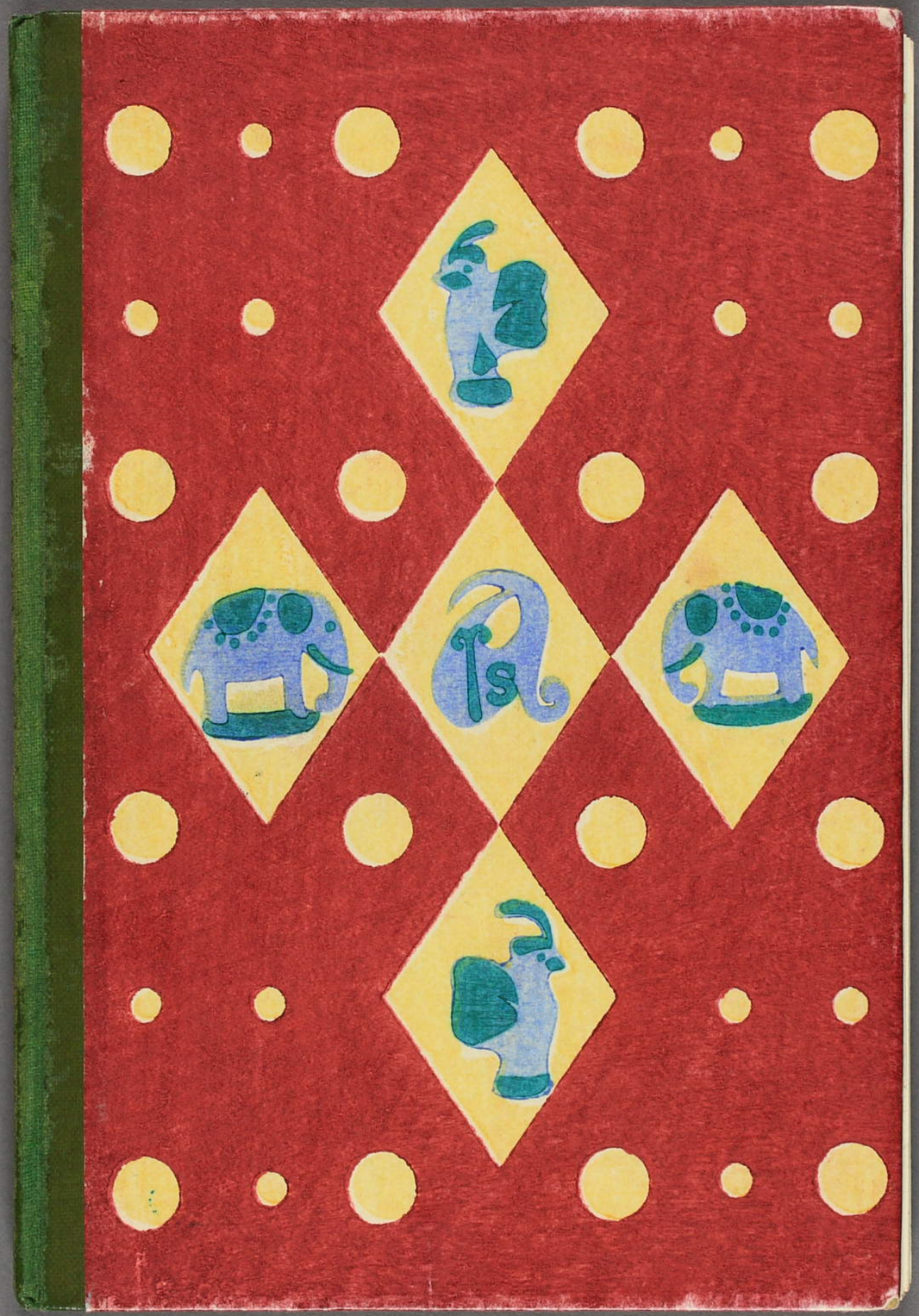
トンボの眼玉

北原白秋

社會資合

スルア

[illegible]



白秋童謡集

玉眼のボント

第一集

入緒

アルス

行發

白秋童謡集

玉眼のポント

第一集

入繪

アルス

行發

はしがき

山火事焼けるな、ホウホケキヨ、
可愛(かは)いい小鹿が焼け死ぬぞ。

これは春の暮、夏のはじめの頃に、夕方かけて、赤い山火事の火の燃える箱根あたりの山を眺めて、この小田原

の町の子供たちが昔歌つた童謡の一つだと申します。

昔の子供たちはかういふ風におのづと自然そのものから教はつて、うれしいにつけ悲しいにつけ、いかにも子供は子供らしく手拍子をたたいて歌つたものでした。

それが、この頃の子供たちになると、小さい時から、あまりに教訓的な、そして不自然極る大人の心で咏まれた學校唱歌や、郷土的のにほひの薄い西洋風の飜譯歌調やに壓えつけられて、本然の日本の子供としての自分たち

の謠を自分たちの心からあごけなく歌ひあげるといふ事がいよいよ無くなつて來てゐるやうに思ひます。

今の子供たちはあまりに自分の欲する童謠やその他を、その學校や親たちから與へられて居りません。それは今の世の中があまりに物質的功利的であるからでもありま す。

私たちの子供の頃は今から考へましても、それはなつかしい情味の深いものでした。あの頃子供であつた私たちが

いかほど大人になりましても、いつまでも忘れられないのは、幼い時母親や乳母たちからきいたあの子守唄の節まはしです。

でんぐ〳〵太鼓に笙の笛のあの「ねんねのお守は何處へ行た。」や、山では木のかず萱のかず、天へのぼつて星のかずの「坊やのかはいさ限りない。」や、十三七つの「お月さま』や、十五夜お月さま見て跳ねるのあの「うウさぎ兎」や、こつちの水は甘いぞ、あつちの水は苦いぞ（にが）その赤い帽子の

螢や、一羽の雀が云ふことにのあの「三羽の小さな雀」の謡や、思ひ出せば數かぎりもありません。

あの野山の木萱のそよぎからおのづと湧いて出たと云ふ民謡や、かうした純日本の童謡やが、次第に廢れてゆく心細さはありません。私は一方にさうしたいつまでも新らしい、而かも日本人としての純粋な鄉土的民謡を復興さしたいと云ふ考を持つてゐますにつれて、おなじやうにかうした童謡をも今の無味乾燥な唱歌風のものから元の昔

に還さなければならないと思つてゐます。さうしてその本然の心を失はないで、さらに新らしい今の日本の童謡をもその上に築き上げなければならないと願つてゐます。

私がかういふ心から童謡に興味を持ち出したのも随分と古い事でした。おそらく今の詩人たちの中でも私がいちばん古くから手をつけたのでないかと思ひます。それに私の曾つて公にしました抒情小曲集の「思ひ出」あたりにも随分と童謡味の勝つたものが載せられてあります。

この集の中でも「曼珠沙華」の一篇はその「思ひ出」の中から抜いたのでした。外にもいろ〳〵ありますが、幾分子供たちに讀ませるには大人びすぎるので差控えました。

「南京さん」「屋根の風見」の二篇も七八年前に作つたのです。その外は皆新らしいものです。

昨年から丁度折よく、お友だちの鈴木三重吉さんが、子供たちのためにあの藝術味の深い、純麗な雑誌「赤い鳥」を發行される事になりましたので私もその雑誌で童謡の

方を受持つ事になつて、それでいよいよかねての本願に向つて私も進んでゆけるいい機會を得ました。

これらの童謠はおほかたその「赤い鳥」で公にされたものですが、今度改めて今までの分を一まとめにして出版する事になりました。これを第一輯として、これからも次ぎ次ぎに刊行するつもりでゐます。それに私自身のものばかりでなく、いろ〳〵の國々の童謠をも御參考のために手をつけて譯して見たいと考へて居ります。

私の童謠はただ美しいとか上品とか云ふばかりを主にして居ますのではありません。それに多少物心のついた十三四歳以上の少年少女たちの謠ひものとしてよりも、それ以下の子供たちに讀ませるもの、それには素朴な混り氣のない子供の感覺といふこと、さうした潑剌とした感覺に根ざしたあるものから、素裸な子供の心を直接にうつ、さうしたものをと心がけて居りますのです。

ほんたうの童謠は何よりわかりやすい子供の言葉で、子

供の心を歌ふと同時に、大人にとつても意味の深いもの
でなければなりません。然し乍ら、なまじ子供の心を思想
的に養はうとすると、却つて悪い結果をもたらす事が多
いのです。それであくまでもその感覚から子供になつて、
子供の心そのままな自由な生活の上に還つて、自然を觀、
人事を觀なければなりません。

子供の感覺が、ごんなに鋭く、新らしいか、生きてゐる
かと云ふ事について、一例をあげますと、子供はあの陰鬱

な灰色の空から、初めて鮮かな白い雪の粉がチラチラと
降り出しでもして來ますと、それは喜び勇んで、小躍りし
ながら、かう歌ひます。

雪花(ゆきばな)ふるわな、
空に蟲が湧くわな、
扇腰にさいて、
きりりつと舞ひましよ。

これを大人に咏ませると、「雪は鵝毛に似て飛んで散亂

し。」と歌ひます。子供は空に湧く白い粉雪の一片一片を今生れたばかりの活きた羽蟻の一匹一匹として喜び。大人は死んだ鵝鳥のそのむしり散らした羽毛の一片一片に讐へて觀賞します。子供の感覺は活きて動き、大人の感覺はその智慧から先づ盲(めしひ)にされて死んで了つてゐます。大した違ひではあるまいかと思ひます。

子供に還ることです。子供に還らなければ、何一つこの忝い大自然のいのちの流をほんたうにわかる筈はありません。

「子供は大人の父だ」と申す事も、この心をまさしく云つたものに外なりません。私たちはいつも子供に還りたい還りたいと思ひながらも、なかなか子供になれないので殘念です。

私の童謠に少しでもまだ大人くさいところがあれば、それは私がまだほんたうの子供の心に還つてゐないのです。さう思ふと、子供自身の生活からおのづと言葉になつて

歌ひあげねばならぬ筈の童謡を大人の私が代つて作るなどと云ふ事も私には空おそろしいやうな氣がします。然し、私たちから先づ、その子供たちのさうした歌ごころを外へ引き出してあげる事も必要だと思ひます。さういふ心で私は童謡を作つて居りますのです。

私もこれから努めます。だんだんとほんたうの子供の心に還るやうに、ほんたうの童謡をも作れるやうに。

私はいま小田原のとある山の上に木兎の家といふお伽噺の中にあるやうな幼びた小さな家を自分でこしらえて、花を育てたり野菜を栽ゑたりして住つてゐます。子供たちも随分と遊びに見えます。私はその罪のない子供たちの笑ひ聲の中に交つて、いつも童謡の中の世界で子供らしく遊んでゐます。どなたでもお子さんのある方は御一緒にお遊びにいらして下さるやうに。

大正八年九月

相州小田原木兎の家にて

白秋

目次

とんぼの眼玉……五
夕焼とんぼ……一一
八百屋さん……一四
お祭……二一
のろまのお醫者……三〇
ほうほう螢……三八
鴉の浮巣……四二
金魚……四六

2
雨……五二
赤い帽子、黒い帽子、青い帽子、……五九
南京さん……六二
曼珠沙華……六六
ちんころ兵隊……七三
とほせんぼ……七九
りすりす小栗鼠……八三
山のあなたを……八六
ねんねのお鳩……九三
赤い鳥小鳥……九七
鳥の巣……一〇一
なつめ……一〇五
うさうさ兎……一一一
屋根の風見……一一四
かぜひき雀……一二一
あわて床屋……一二七
舌切雀……一三三
雀のお宿……一三九
物臭太郎……一四三
雉ぐるま……一四九
3

挿畫目次

矢部季氏

表紙 …… 三
外裝 …… 三九
扉 …… 六三
とんぼの眼玉（三色版） …… 三
ほうほう螢 …… 三九
南京さん …… 六三

赤い鳥小鳥（三色版） …… 九五

清水良雄氏

夕燒とんぼ …… 九
お祭 …… 一九
鳰の浮巢 …… 四三
金魚（三色版） …… 四七
曼珠沙華 …… 六七
とうせんぼ …… 六七
ねんねのお鳩 …… 九一

なつめ……一〇三
屋根の風見……一一五
あはて床屋……一二五
雀のお宿……一三七
物臭太郎……一四三
雉ぐるま……一四七

初山滋氏

八百屋さん（三色版）……一五
のろまのお醫者……三一

雨（二度刷）……五三
赤い帽子、黒い帽子、青い帽子、……五七
ちんころ兵隊……七一
りすりす小栗鼠（二度刷）……八一
山のあなたを……八七
鳥の巣……九九
うさうさ兎（二度刷）……一〇九
かせひき雀（二度刷）……一一九
舌切雀（二度刷）……一三一

とんぼの眼玉

蜻蛉の眼玉

蜻蛉の眼玉は大かいな、
銀ピカ眼玉の碧眼玉、
圓るい圓るい眼玉、
地球儀の眼玉、
忙しな眼玉、

眼玉の中に、
小人が住んで、
千も萬も住んで、
てんでんに蟲眼鏡で、あつちこつち覗く。
上向いちやピカピカピカ。
下向いちやピカピカピカ。
クルクル廻しちやピカピカピカ。

玉蜀黍に留れば玉蜀黍が映る。
雁來紅に留れば雁來紅が映る。
千も萬も映る。
綺麗な、綺麗な、
五色のパノラマ、綺麗な。

ところへ、子供が飛んで出た、
鶺鴒ひゆうひゆう飛んで出た。

さあ、逃げ、
わあ、逃げ、
麥稈帽子が追つて來た。
千も萬も追つて來た。
おお怖、
ああ怖。
ピカピカピカピカ、ピッカピカ、
クルクル、ピカピカ、ピッカピカ。

夕焼とんぼ

大きな、赤い蟹が出て、
蘭草をチヨッキリちよぎります。
蘭草の中から火が燃えて、
その火が蜻蛉に燃えついた。
蜻蛉は逃げても逃げきれぬ、

唐黍畑に逃げて来る、
唐黍の頭が紅なつた。
蓼の花に飛んで来る、
蓼の花にも火がついた。
野川の薄に留つた、
薄の穂さきも火になつた。
お庭の鶏頭にやすみませう、
鶏頭もいつぱい火事になる。

助けて下され焼け死ぬる、
蜻蛉は藺草に縋りつく。
蜻蛉の眼玉は圓ござる、
くるくる廻せば山が見え、
山の中から猿が出て、
あつち向いちや、赤んべ、
こつち向いちや、赤んべ。

八百屋さん

大枇杷、小枇杷、
水蜜桃、葡萄、
苺や野菜、
お籠に入れて、
頭に載せて、

かつこ、かつこ、行けば、
薄紫の、
馬鈴薯畑の花盛り。
あちらでもかつこう、
こちらでもかつこう、
郭公が啼いて、
雨が霽れて、
田舎は涼しい涼しいな。

かつこう、かつこう、
私もいそいそ口笛吹いて、
足拍子とつて、
お靴でかつこかつこ、躍りませう。
かつこ、かつこ、かつこな、
たららら、らるら。
小母さん、今日は、
小父さん、今日は。

お祭

わっしょい、わっしょい
わっしょい、わっしょい
祭だ、祭だ。
背中に花笠、
胸には腹掛、

向う鉢巻、そろひの半被で、
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい、
神輿だ、神輿だ。
神輿のお練だ。
山椒は粒でも、ピリッと辛いぞ、
これでも勇みの山王の氏子だ。
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
眞赤だ、眞赤だ、夕焼小焼だ。
しつかり擔いだ。
明日も天氣だ。

そら、揉め、揉め、揉め。
わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。
俺らの神輿だ。死んでも離すな。
泣蟲やすつ飛べ。差上げて廻した。
揉め、揉め、揉め、揉め、揉め。

わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
廻すぞ、廻すぞ、
金魚屋も逃げろ、鬼灯屋も逃げろ。
ぶつかつたつて知らぬぞ。
そら退け、退け、退け、

わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい、
子供の祭だ、祭だ、祭だ、
提灯點けろ、
御神燈献げろ、
十五夜お月様まんまるだ。

わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい、
あの聲何處だ、
あの笛何だ。
あつちも祭だ、こつちも祭だ。
そら揉め、揉め、揉め。

わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい、
わつしよい、わつしよい。
祭だ、祭だ。
山王の祭だ、子供の祭だ。
お月様紅いぞ、御神燈も紅いぞ。
そら揉め、揉め、揉め、

わつしよい、わつしよい。

わつしよい、わつしよい。
わつしよい、わつしよい。

のろまのお醫者

蚊の聲ぶんぶん。
ごろすけほう。
今夜はお盆の十六日。
お閻魔樣の盆をどり。
蛙の音頭で始めよか、

蛙の小母さん物云へぬ。
咽喉が腫れたか、腹痛か、
腹が痛けりや醫者呼んで来う、
醫者は何醫者、かへろ醫者。

蚊の聲ぶんぶん。
ばあくばく。
空には紅いお月様、

小藪ぢやわんぐり蟾蜍。
今夜のお菜は旨ござる。
ところへ兎が飛んで来て、
もしもし、頼みぢや、早よお出で、
よしよし待たしやれ、今直ぐぢや。
お腹が減つてはごもならぬ。

蚊の聲ぶんぶん。

雨しよぼしよ。
いそいで御座れよ間にあはぬ。
それではまゐろと、のつそのそ。
兩手に洋杖、折靴、
山高帽子でやつて來たが、
踊も濟んだか聲もなし。
こいつはしまつた面目ない。
田圃はまつくら、暗闇。

蚊の聲ぶんぶん。

ごろすけほう、

ごろすけほう、むだぼうこう。

お山ぢや梟が嗤ひ出す。

雨はざあざと降つて来る。

おやおやおや、こりやごうぢや。

目ばかりぱちくり、のろま醫者、

のろくさ、困つて逃げこんだ。

お閻魔様の、そりや、縁の下、縁の下。

ほうほう螢

ほうほう螢、篠螢、
晝間は赤い豆頭巾、
日暮はピカピカ、豆袴、
一のお宮で灯を貰ろて、
二の宮田圃へ灯とぼしに、

三の鳥居は藪の中、
四の宮くぐれば貉堀、
貉が啼き出しや、雨がふる、
早よ早よお戻り、夜は凄い、
眞夜中過ぎれば歸られぬ。
ほうほう、螢、篠螢、
水神様はまだ遠い。

鳰の浮巣

鳰の浮巣に灯がいつた、
灯がついた。
あァれは螢か、星の尾か、
それとも蝱の目の光。

蛙(かはづ)もころころ啼(な)いてゐる、
啼(な)いてゐる。
ねんねんころころ、ねんころよ。
梟(ふくろ)もぽうぽう啼(な)き出(だ)した。

金魚

母さん、母さん、
ごこへ行た。
紅い金魚と遊びませう。
母さん、歸らぬ、

さびしいな。
金魚を一匹突き殺す。

まだまだ、歸らぬ、
くやしいな。
金魚を二匹締め殺す。

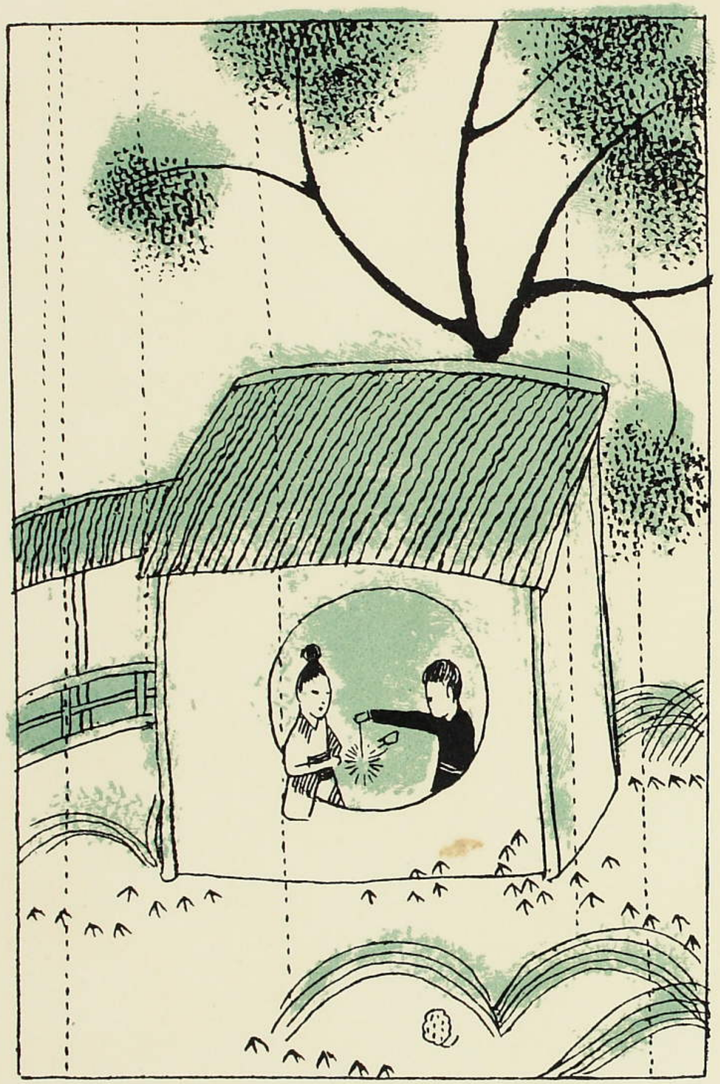
なぜなぜ、歸らぬ、

ひもじいな。
金魚を三匹捻ぢ殺す。

涙がこぼれる、
日は暮れる。
紅い金魚も死ぬ、死ぬ。

母さん怖いよ、

眼が光る、
ピカピカ、金魚の眼が光る。



雨

雨がふります。雨がふる。
遊びにゆきたし、傘はなし、
紅緒の木履も緒が切れた。
雨がふります。雨がふる。

いやでもお家で遊びませう、
千代紙折りませう、たたみませう。

雨がふります、雨がふる。
けんけん小雉子が今啼いた、
小雉子も寒かろ、寂しかろ。

雨がふります。雨がふる。

お人形寝かせごまだ止まぬ。
お線香花火もみな焚いた。

雨がふります。雨がふる。
晝もふるふる。夜もふる。
雨がふります。雨がふる。

赤い帽子、黒い帽子、青い帽子

ここは谷川、丸木橋。

赤い帽子をかぶった子供、
黒い帽子をかぶった子供、
青い帽子をかぶった子供。

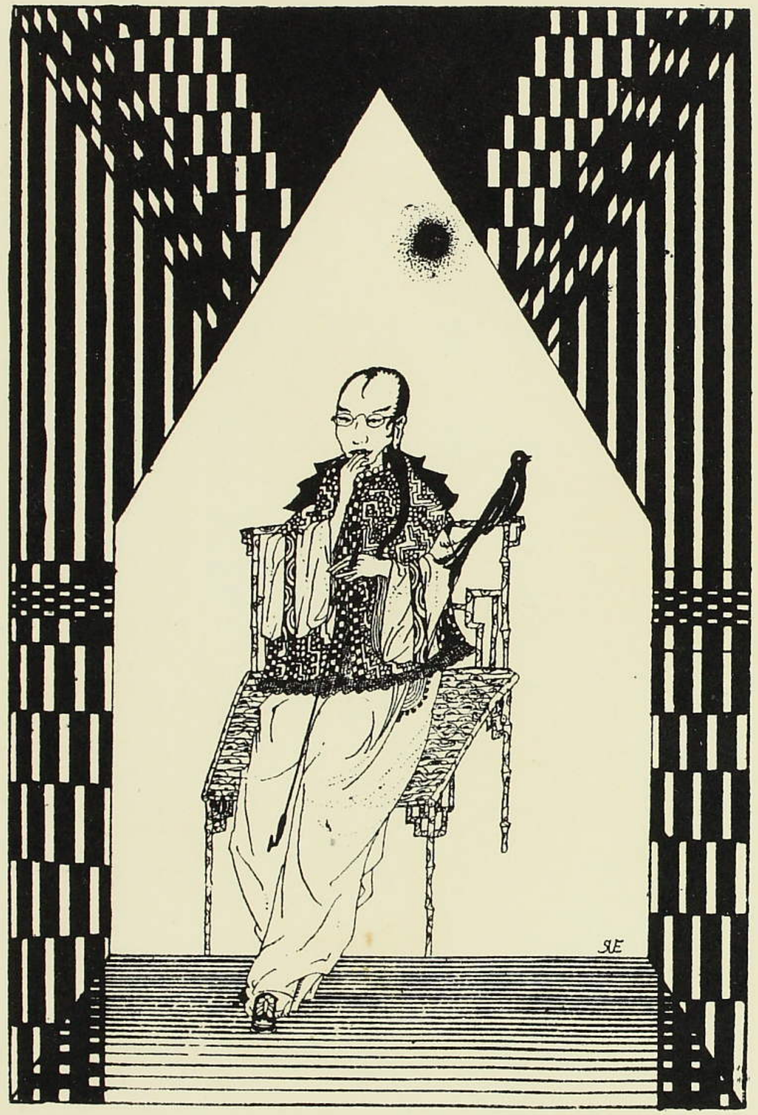
60

渡るにやあぶなし、戻られず。
みんなが前向き一、二、三、
みんなが後向き、一、二、三。

赤い帽子は笑ひ出す、
黒い帽子は泣き出す、
青い帽子は怒り出す。

61

みんながびくびく、一、二、三、
みんながぶるぶる、一、二、三。



南京さん

李さん、鄭さん、支那服さん、
あなたの眼鏡はなぜ光る、
涙がにじんで日に光る。
鳥屋の硝子も日に光る。
目白、カナリヤ、四十雀、

鶉に文鳥に黒鶫、
鳥もいろいろあるなかに、
おかめ鸚哥はおごけもの、
焦れて頓狂に啼きさけぶ。
さてもいとしや、しをらしや、
けふも入日があかあかと
わかい南京さんは涙顔。

曼珠沙華

ゴンシャン、ゴンシャン、何處へ行く。
赤いお墓の曼珠沙華、
曼珠沙華、
けふも手折りに來たわいな。

ゴンシヤン、ゴンシヤン、何本か。
地には七本血のやうに、
血のやうに、
ちやうごあの兒の年の數。

ゴンシヤン、ゴンシヤン、氣をつけな。
ひとつ摘んでも、日は眞晝、
日は眞晝、

ひとつあとからまたひらく。

ゴンシャン、ゴンシャン、何時まで取つても曼珠沙華、

恐や、赤しや、まだ七つ。

註　ゴンシャンは九州の柳河といふ町の言葉で、お嬢さんといふことです。

ちんころ兵隊

ちんころ、ちんころ、ちりちりちん、
ちりちりちんころ、ちりちりちん。
ちんころ兵隊、喇叭卒、
てとてと、鐵砲も肩にかけ。

ちんころ、ちんころ、ちりちりちん、
ちりちり、ちんころ、ちりちりちん。
それそれ、いくさに出かけませう、
尖り帽の緋房も伊達ぢやない。

ちんころ、ちんころ、ちりちりちん、
ちりちり、ちんころ、ちりちりちん。

いやいや、いくさは、飴ほしい、
お腹がすいては歩まれぬ。

ちんころ、ちんころ、ちりちりちん、
ちりちり、ちんころ、ちりちりちん、
ちんころ兵隊、赤胴衣、
飴屋のお鉦で泣き出した。

ちんころ、ちんころ、ちりちりちん、
ちりちり、ちんころ、ちりちりちん。

とほせんぼ

赤い赤い鳳仙花。
白い白い鳳仙花。
その中くぐつて通りやんせ。

赤い花ちるよ。

白い花ちるよ。
いやいや、おまへは通しやせぬ。

りすりす小栗鼠

栗鼠、栗鼠、小栗鼠、
ちよろちよろ小栗鼠。
葡萄の房が熟れたぞ、
啼け、啼け、小栗鼠。

栗鼠、栗鼠、小栗鼠、
ちよろちよろ小栗鼠、
あつちの尻尾が太いぞ、
揺れ、揺れ、小栗鼠。

栗鼠、栗鼠、小栗鼠、
ちよろちよろ小栗鼠、
ひとりで飛んだらあぶないぞ、

負され、負され、小栗鼠。

山のあなたを

山のあなたを、
見わたせば、
あの山戀し、
里こひし。

山のあなたの
青空よ、
ごうして入日が
遠ござる。

山のあなたの
ふるさとよ、
あの空戀し。

母(はは)こひし。

ねんねのお鳩

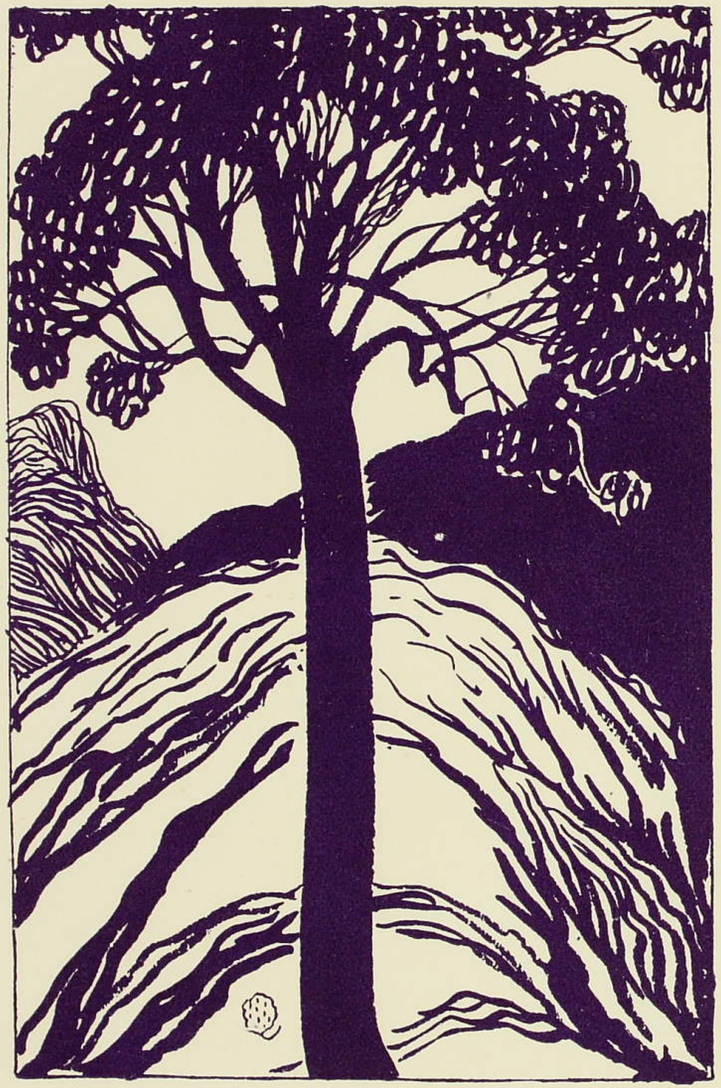
ねんねん、ほろろん、ねんほろよ。
坊やはよい子だ、ねんねしな。
ねんねのお鳩が歌ひませう。
泣かずに、ほろほろ、ほろりこよ。

坊やは乳が無し、母もなし。
雪はふるふる、夜は長し。
ねんねんほろろと啼いたとて、
どうして、お鳩よ、眠らりよか。

赤い鳥小鳥

赤い鳥、小鳥、
なぜなぜ赤い。
赤い實をたべた。

白い鳥、小鳥。



なぜなぜ白い。
白い實をたべた。

青い鳥、小鳥。
なぜなぜ青い。
青い實をたべた。

鳥の巣

あれ、あれ、なアに。
ありや、鳥の巣よ。
あの巣をとろか。
あの木は高い。
あの山のぼろ。

あの山寒い。
なぜ〳〵寒い。
夕焼が寒い。
まだ空赤いに。
それでも、風はさアむいよ。

なつめ

棗。棗。

赤い棗。

盗んだ棗。

この棗ごうしやう。

食べれば怖い、

見せれば叱る、
棄てるは惜しい。
鸚哥にあげよ、
鸚哥は逃げる。
鴉にあげよ、
鴉は睨む。
七面鳥にやつたれば、
怒つた怒つた、眞赤になつて怒つた。

怖い棗、
盜んだ棗、
お手々に入れて、
袂に入れて、
歸つて寢たら、
棗がぶんぶん鳴り出した。
蜂になつた、蜂になつた、
棗がいつぱい螫しに來た。

怖(こわ)い棗(なつめ)、
怖(こわ)い棗(なつめ)。

うさうさ兎

てんてん手毬、
おててん手毬、
手毬の中に、
何があて跳ねる。
てんてん手のなし、

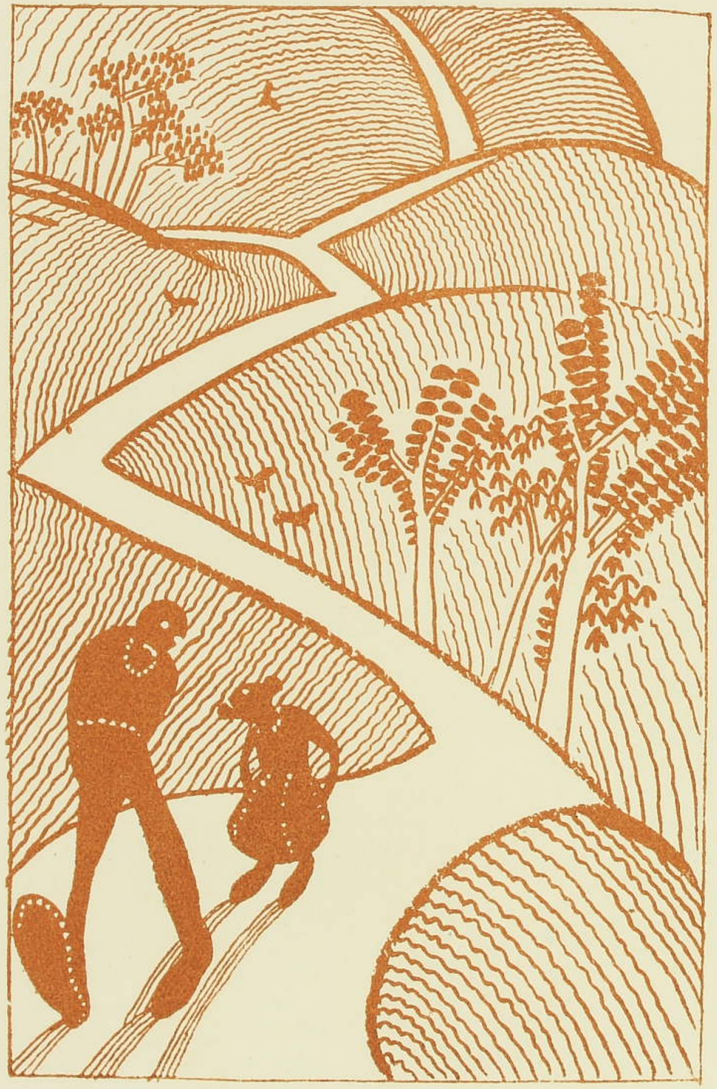
みんみん耳のなし、
うさうさ兎の子が跳ねる。
一つ追ひ出そ。
二つ追ひ出そ。
三つ追ひ出そ。
四つ追ひ出そ。
五つ追ひ出そ。
六つ追ひ出そ。

七つ追ひ出そ。
八つ追ひ出そ。
九つ追ひ出そ。
手毬てんてん、雪こんこん、
遠いお山の山奥へ、
十、たうとう追ひ出した。

屋根の風見

子を奪ろ、子奪ろ、
「鴻の巣」の窓に、
硝子が光る。
露西亞のサモワル、紅茶の湯氣に、
かつかと光る。

江戸橋、荒布橋、
青い燈が點く……向うの屋根に、
株の風見がくるくるまはる。
晴か、曇か、霙か、雪か、
雲はあかるし、夕日は寒し、
七歳お店の長松さへも、
黒い前掛ちよいとしめて、
空を見上げちや眞面目顔、



眞面目顔。

鴻の巣とは西洋料理屋の名です。

かぜひき雀

草山越えて、野を越えて、
大きなお靴と小さなお帽子。
お家も見えたぞ、うんとこしよ、
大きな爺さんお靴を脱ぐと、
小さな婆さんお帽子を脱ぐと、

いつしよに草臥れ、ぐうぐうぐう。

空は赤い夕焼で、
雀も歸ろと、ふたりづれ、
よいもの見つけた、ちゆうちゆうちゆ、
婿さん雀はお靴へこそり、
嫁さん雀はお帽子へこそり、
いつしよに草臥れ、ぐうぐうぐう。

風が吹きます、月が出る、
白いお蕎麥の花の中、
あんまり寒いで目が醒めた。

爺さん、婆さんハックッシヨと云へば、
お靴の中でも雀がハックッシヨ、
お帽子の中でもハァハックッシヨ。

おやおや大變、風邪ひいた、
お山は雪で眞白だ。
ハックッシヨ、〳〵、ハァハァハックッシヨ、
ハックッシヨ、〳〵、ハァハァハックッシヨ。

あわて床屋

春は早うから川邊の葦に、
蟹が店出し、床屋でござる。
チヨッキン、チヨッキン、チヨッキンナ。

小蟹ぶつぶつ石鹸を溶かし、

親爺自慢で鋏を鳴らす。
チヨッキン、チヨッキン、チヨッキンナ。

そこへ兎がお客にござる。
ござうぞ急いで髪刈つておくれ。
チヨッキン、チヨッキン、チヨッキンナ。

兎ァ氣がせく、蟹ァ慌てるし、

早く早くと客ァ詰めこむし。
チヨッキン、チヨッキン、チヨッキンナ。

邪魔なお耳はぴよこするし、
そこで慌ててチヨンと切りおとす。
チヨッキン、チヨッキン、チヨッキンナ。

兎ァ怒るし、蟹ァ耻よかくし、

爲方なくなく穴へと逃げる。
チヨッキン、チヨッキン、チヨッキンナ。
爲方なくなく穴へと逃げる。
チヨッキン、チヨッキン、チヨッキンナ。

舌切雀

舌切雀はごこへ行た、
ごこへ行た、
ごれごれ探しに出かけませう。
雀のお宿はあれかいな、

134

あれかいな、
チヨッポリ小藪が山の蔭。

とんとんからりこ、とんからり、
とんからり、
中ではとんから梭の音。

お宿はここかとたづねたら、

たづねたら、
おおおお、お爺さん、ようお出で。

舌切雀のお土産は、
お土産は、
葛籠にいつぱい綾錦。

135

雀のお宿はどこかいな、

ごこかいな。
爺さん私も行て見よか。
慾ばり婆のお葛籠は、
お葛籠は、
開けたらびつくりおオ化。

雀のお宿

笹藪、小藪、小藪のなかで、
ちゆうちゆうぱたぱた、雀の機織、
彼方でとんとん、
此方でとんとん、
やれやれ、いそがし、日がかげる。

ちゆうちゆうばたばた、ちゆうばたり。

雀、雀、雀の子らは、

ちゆうちゆうばたばた、その梭ひろひ。

上へ行つたり、

下へ行つたり、

やれやれ、いそがし、日がつまる。

青縞、茶縞、茶縞のおべべ、

ちゆうちゆうばたばた、何反織れたか、

朝から一反、

晝から一反、

やれやれいそがし、日が暮れる。

ちゆうちゆうばたばた、ちゆうばたり。

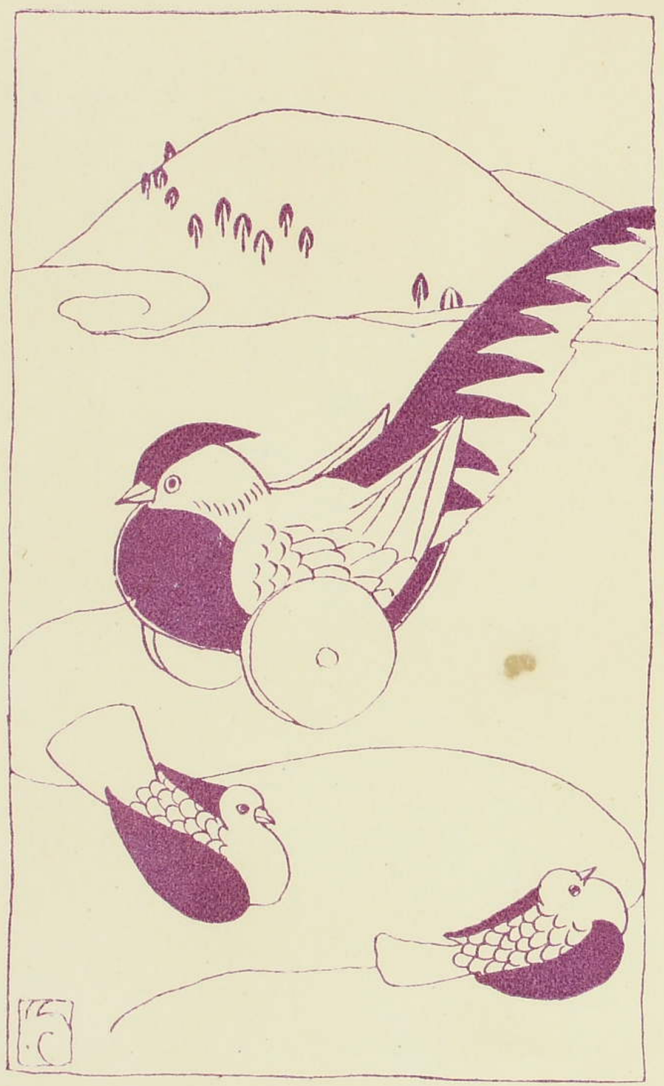
物臭太郎

物臭太郎は朝寝坊、
お鐘が鳴つても目がさめぬ、
鶏が啼いてもまだ知らぬ、
物臭太郎は家持たず、

お馬が通れご道の端、
お地頭見えても道の端。

物臭太郎はなまけもの、
お腹が空いても臥てばかり、
藪蚊が螫しても臥てばかり。

物臭太郎は慾しらず。



お空の向うを見てばかり、
櫻の花を見てばかり。

雉ぐるま

雉、雉、雉ぐるま、
お雉の背中に積むものは、
子雉、子々雉、孫の雉。

雉、雉、雉ぐるま、

150

お雉のくるまを曳くものは、
子鳩、子々鳩、孫の鳩。

雉、雉、雉ぐるま、
雉は子の雉、父戀し、
鳩は子の鳩、母戀し。

雉、雉、雉ぐるま、

151

雉はけんけん、鳩ぽつぽ、
啼いてお山を今朝越えた。

雉ぐるまの玩具は今でも筑後の清水寺の觀世音で賣つてゐます。この寺は行基菩薩といふ方の御開基です。

ほろろうつ山の雉子の聲きけば父かとぞ思ふ。

行基

とんぼの眼玉 終

大正八年十月十二日印刷
大正八年十月十五日發行

【定價 壹圓九拾錢】

著作者 北原白秋

發行者 北原鐵雄
東京市神田區中猿樂町十五番地
合資會社アルス代表者

發行者 鈴木泉藏
東京市神田區中猿樂町十五番地

印刷者 太刀川辰藏
東京市神田區西小川町一丁目九番地

發行所 合資會社 アルス
東京市神田區中猿樂町十五番地
電話本局二九八八番
振替東京二四八八八番

版權所有

北原白秋氏著　矢部季氏裝禎

白秋小唄集

袖珍　定價壹圓八拾錢
箱入　送料八錢

○本文全部舶來光澤紙二度刷。表紙ラセン模様絹繻子

雨はふるふる、城ヶ島の磯に、
利久鼠の雨がふる。
雨は眞珠か、夜明の霧か、
それともわたしの忍び泣き。

（城ヶ島の雨の一節）

歌ひ易く解し易く愛誦措く能はざる白秋氏の珠玉の如き小唄二百餘編を收む。殊にその大半は氏の新作にして附錄としてかの有名なる『さすらひの唄』『カルメンの唄』等を附す。

□燦爛たる寶玉詩集。眩目恍惚たる日本詩壇空前の美本。好評嘖々三句にして第四版成る□

北原白秋氏編序及裝禎

歌集 **木馬集**

小形 箱入 定價壹圓貳拾錢 送料八錢

○本文全部舶來光澤紙。表紙木版手刷五度刷

歌壇の權威白秋氏、潜心現代歌人數萬の歌を閲し千より百を拔き百より十を採るの苦心を以て玲瓏珠の如き作壹千五百首を得て歌壇に推薦す。一首一首總て琢磨せられたる作品にして、その感覺の俊敏なる、その態度の純一なるまさに燦然たる珠玉を聯ねたるが如く、その眞價は優に一流作家の畢を凌がんとす。本書は實に眞實無垢なる人間性の偉大を證するもの敢て歌壇の批判を待つ。

□白秋氏激賞して寶玉選集と名づく、以て其眞價を知れ□

□歌壇の一大驚異!! 大正の新萬葉集!! □

美術界の三大名著

三宅克己氏著
實地指導 **趣味の寫眞術** ポケット型 箱入 定價壹圓八拾錢 送料十二錢
寫眞版二十葉。凸版四十六面挿入

山本鼎氏著及畫
改訂縮刷 **油畫の描き方** ポケット型 箱入 定價壹圓四拾錢 送料八錢
三色版四葉。寫眞版十葉挿入

三宅克巳氏著及畫
改訂縮刷 **水彩畫の描き方** ポケット型 箱入 定價壹圓八拾錢 送料八錢
三色版十一葉。寫眞版凸版四十二面挿入

□著者は一流。挿畫は豐富。說明は懇切。眞に天下一品の手引書□

アルス近刊書

北原白秋氏作
小松耕輔氏曲　【泊り舟】（アルス樂譜第一編）

同　【芭蕉】（アルス樂譜第二編）

同　【赤い夕日】（アルス樂譜第三編）

前田蓮山氏著　【社會の徽】

堺利彦氏譯
山川菊枝女史譯　【女性中心と同性愛】

小松耕輔氏著　【西洋音樂の智識】